
とある忍者の写輪眼

hearts666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある忍者の「輪眼

【Zコード】

N1511S

【作者名】

hearts666

【あらすじ】

とあるの世界に入した万華鏡「輪眼を持つ男がやらかす話です。

第一話（前書き）

久々の投稿です！

三話連続で投稿しますからなにか感想をくれると嬉しいです！

でもあまりキツいことをいつたら泣きます(、；；；)

第一話

NARUTOって面白いですね

いろんな忍術とか体術があって、なんかいつも一心をくすぐられ
るような……。

読んだことある人なら真似して印を結んだりしますよね?

あつ…………ないですか……

そんなバカみたいなことはしないこと……

テメヒとは違ひんだよ、このカス野郎と……。

わつわと帰つてママのおっぱいでも吸つてるこの童貞と……。

おい、さあがに泣くぞ?・マジ泣き出すの?・もうハラハライドとかねえ
ぞ?

まあこの話はこのぐらーにじこといて、俺こと立花 薩（男）がなぜこんな話をしているかと言つと……、

ハイ、そここの君言ひていりや。

セイツ！

そうだね、プロテインだね！

このくだりがやつてみたかった。後悔はしている。

まあ、要約しまくると、死に方が可哀想だったから生き返らせて
やんよ／＼／＼／＼／＼

みたいなツンデレを田の前にいる女神様ならぬ口リ神様に言われ

てる状態。

ちよつと詳しく述べ、

俺死ぬ（風呂で悶絶して溺死）

何故か目の前にあつちやな女のです。

持ち前の紳士れで一緒に遊んであげる。

めつせなつかれる。

現在。

いんな感じ。

あ～ゆ～ね？

「お姉ちゃんの生をたいといひなら何処でも良こよー」

「お兄ちゃんです。」

「今ならお姉ちゃん好きな能力をひとつだけあげるーー。」

「お兄ちゃんです。」

「あー早く選んでーおねえ…お兄ちゃん?」

「ねえ、そんなん俺つて女顔?」

少し傷つきながらも考えてみた。

まずは能力から選ぶか…。

「万華鏡写輪眼を失明とかしないで使えるようにになつたいー。」「やつぱりNARUTOでしょう。前半にあんなに推してたの」「でBLOODSHEDはないでしょ。よし、ならやつぱり…」

「良いくー。」「さすが神様!」

「次は?」

「じゃあ忍術全部使えるは?」

「うーん……、さすがにそれをすると、願い2つ分ぐらいになるかな？」

どうやら神様でも難しそうで少し表情を歪めてる。

わざわざしよう、『』で2つ使うか、違う能力にするか。

俺的にはNARUTOの能力以外にもあと一つ、『あの能力』を入れたい。

思考中……

よし決めたー。こうしよう！

「2つ目は莫大なチャクラで、3つ目は『』でー！」

『』でー！」

「わかったー　じゃあ転生するよ～、」

「ハイ！始めてくださいー！」

「いっくよ～…、それツ！」

女神様の可愛いかけ声と共に俺は眩い光に包まれた。

あれ？行きたい世界言つたっけ？とか思いながら。

第一話（前書き）

— | 話題です

第一話

少し俺が生きてる頃の話をしよう。

俺は十五才で、今度の四月を迎えると高校生だった。一応運動は得意で、高校もスポーツ特待生だった。

俺の家族は両親と妹がいた。妹はまだ6才で、もう可愛さ爆発だ。

おい、そこの「ロリコンxxxxxxxxキモスxxxxxxxx」とか言つた奴、あとで職員室まで来なさい。

ちなみにお風呂も一緒に入りますよ。

通報はやめてください。俺が入つてたら勝手に入つてくるんです

――

あつ、痛い痛い！石投げないで！

そう考へると、もしかしたら妹が俺の遺体の第一発見者なのかな？

そう考へると、少し……悲しい。

両親の仲はあまり良くない。顔を合わせたら喧嘩の毎日。離婚しなかつたのは世間体を気にしてたから。

妹にとつては俺が親代わりだったかもしれない。

妹と別れるのは現世での唯一の心残りだ。

まあ俺の話むじのべらいで良いだろ?。そろそろ俺も起きるとする。

起きたら、新しい世界が待ってるはずから。

第三話

あれだよね、人生って上手くいかないよね。

最後の最後でこれってね。何?これがオチ?さすがにないよ。溜めて溜めてドン!って意味わかんねえよ。

あつ、嘘やんじにひけ。嘘やんも期待してたゲームが発売延期になつた!ひとつありますか?

ちなみに俺はないです。

だから石はダメーッ!!

まあ発売日知らなくて売つてたら買つタイプですから、その代わりに欲しいものが売り切れはよくあるんですけどよ。

話はだいぶずれたけど、まあ言いたいことは、

JIJIZARUTOの世界じゃなくね?

だつてフツーに車とか走つてゐよ? 犯者とかいないよ?

逆に最先端技術をもつた「とある魔術の禁書目録」の世界だ。

何? 禁書に金かけてたのバレた?

それともｗｅｂラジオ聞いたのがバレた?

確かにNARUTOの世界に行きたいとか言ってないけどさあ…、そこは考えようよ。チャクラと写輪眼つて言つたらNARUTOでしょ……。ijiまで来たら発売延期ビリバロか発売中止レベルじやあねえかよ…。

いやまあ好きですよ? 禁書。

単行本とか原作とかも読みましたよ?

新約出たときはガツッポーズしましたよ?

そんなこと考えながら俺は小学校に通つてます。

名前は何故か前世と同じ立花葵。顔も前世と同じ女顔だ。

同級生（小学六年生の男の子）に何回「殴られたことが……」。

血腫じや ねえが女の子にも何回か殴られたぜー！

丘合つぽかつたが……。

何度もニュースで学園都市を取り上げているのを見たので気がついた。

はあ……、ビームましょ？

原作に介入はモチロンだが、どうせ行こう、『とある魔術の禁書目録』で魔術師相手にドンパチするか、『とある科学の超電磁砲』で女の子とイチャイチャするか……。

まあ男ならもうろん女の子と……グフフ……

通報はヤメテー！ー（＼＼＼＼＼）

えつ？修行はしてねえのかこの変態って？

もううんしてるよー、困った時の影分身で。術の練習だつて口り
神様がオマケでくれた巻物に書いてあつたしー。（一年間ずっと嘆
願してたらくれた。）

まあそんな感じで日々を過げーします。

まあ明日の卒業式を終えると俺も学園都市に行くことになつてい
た。

神様の力つて奴かな？

まあ楽しみにしていりつゝと。

第三話（後書き）

いかがでしたか？

まだまだ駄文ではありますがどうかよろしくお願いします。

あと感想、評価を下さいー！

オリキヤラ説明（前書き）

あんがい短かつたからあとがきに入れればよかつたと思つたけど、もつたひない気がしたのでいれてみました。

オリキャラ説明

名前	立花 葵（タチバナ アオイ）
性別	男
身長	164cm
体重	48kg
容姿	真っ黒な髪で男にしたら長め、顔立ちはそんじややけの女の子より女の子。
性格	容姿とは裏腹に男。女っぽくはない。基本マイペース。子供が好きっていう訳ではないけど、妹がいたせいか自分より年下の子供が泣いているとほおっておけない。
能力	万華鏡写輪眼（瞳の模様は六芒星）
風遁、雷遁、火遁、水遁の忍術を使う。	
基本の戦闘は四代目火影のように飛雷神の術を織り混ぜた独特的の戦闘方法	

システムスキャン
身体検査の結果 level 0

オリキャラ説明（後書き）

四話目も投稿しますので見てやってくださいー。

第四話（前書き）

今話から本格的に原作に介入していきます。

「JJK学園都市第一学区『風紀委員訓練所』には風紀委員を日指して日々訓練をしている生徒がいた。

(まつたく……何でわたくしが志願生と一緒になつて訓練など受け
てこるのでしよう)

「ふぐ」

(「こんなトレーニングを繰り返すために風紀委員になつたわけではあつませんのに……」)

(し
か
も
)

卷之三

(先ほどから腕立て一回もできないような方の隣で……)

ジャッジメント

各校より志願し、選抜された生徒達によつて運営される学園都市の治安維持機関である。

危険を伴う職務であり、また高いモラルが求められるため、九枚の契約書にサインし、十二種類の適正試験と四ヶ月の研修をクリアした志願生にのみ資格が与えられる。

「はいラスト一周！がんばれ」

体がじゅうつく、いかにも体育教師のよつた男が、息も絶え絶えて走つてるよ女の子を見ながら言った。

「あれ、まだ走つてる子いるんですか？」

荷物を持って、たまたま通りかかった女性がたずねてきた。

「ブービーに四周差つけられてるからなあ

「うわあ……それじゃ最後まで残るのは厳しそうですね……」

卒業式を終えて一週間後、俺は学園都市に来ていた。

「やつと原作に入りすりこんだができた……」

と歓喜に震えていた。

「でー…………」

あと迷っていた。

「…………」
どーしましょ？まあどうあえず歩いたらどうかに着くだろう。
と我ながら短絡的に行動したと思つ。

だがこの行動は正しかつた。

「ツー！？」

こきなり目の前に頭がお花畠（文字通り）な女の子が現れた。

「え？え？外…？」

本人も状況がよくわかつていなによつだ。

だが俺の原作知識では確かにこの時ぐらいに強盗が……。

「おー、どうしたー?」

俺は少女の肩を揺すつた。

「あ……」

その娘をよく見たら田に涙をいつぱいにためて、今にも泣き出しそうになつてた。

おーおー……、折角の記念すべき田を邪魔するとはこ一度胸だ。

なんとかその少女から話を聞き、だいたいの状態はわかつた。

興奮していく言葉は支離滅裂。順序もへつたくれもない、意味のよくわからない日本語。

だけど、それ故に伝わった少女の思い。

『白井さんを助けてあげて！』

「話はわかった。君は待つて……」

「え……何処に行く……」

俺は女の子の言葉を無視して印を結んだ。

S H D E 白井黒子

白井 黒子は困っていた。

大見得は切つたものの対抗手段がない。これは自分が作つた危機。これに人を巻き込んでしまったのは自分の甘さのせいだ。せめて初春が呼んでくれる応援が来るまで時間稼ぎを……！

そう思い、相手にかかるうとした瞬間、

「はいストップ。」

やる気のない声と共にいきなり人が強盗犯と黒子の間に割つて入つた。と言つよりも現れた。

その容姿は女らしさもあり、それでいてどこか男らしかった。

黒子は一瞬自分と同じテレビーターかと疑つたが、何処か違和感を感じた。

「なつ……？」

強盗犯も思いも寄らぬ介入に驚きを隠せなかつた。

その介入者はあたりをキヨロキヨロ見回しあと、数秒考えて。

「悪い子はお前か……？」

その時の顔は後世に伝えられるほど凶悪な顔でした。（田井黒子
後日談）

すると強盗犯は身の危険を感じたのか近くにいた女人を人質にしました。

「う、動くな！武器を捨てろ！」

人質ッ！また私の甘さのせいで人が……！

そう思い私は痛めてる足を無理にでも引きずつて飛び掛かろうとすると。

「なっ…」

あたりからいきなり木が生えてきて身動きがままならなくなつた。

「そこから動くなよ…」

その言葉を聞いたからつてすぐ近くには強盗犯、抜け出すことを諦める訳にはいかない。

「早く逃げてください！あなたがかなうような相手じゃあ……！」

「心配すんな。俺はお前より強いから」

バタン

そう言い放った瞬間、強盗犯はいきなり糸が切れた人形のようになってしまった。

黒子には何が起きたかまったくもってわからなかつた。

SIDE 立花葵

「うひ、動くな！武器を捨てろー！」

強盗犯は人質をとりながら俺に言つてきた。

正直ボコボコにしてやりたかったが人質がいるので下手に動けない。後ろの黒子は今にも飛び掛かるうとしている。

はあー…めんどくせえ！

やつぱりここに来るんじゃなかつたと思いつながらも印を結んで黒子が飛び掛からないように幻術を見せる。

魔幻・樹縛殺まげん・じゅばくせつ

「なつ……」

どうやらちゃんと術が発動したらしく、後ろにいた血氣盛んなお子さんは何もない所で一人芝居をしている。

ここでテレポートを使われて壁に挟まれるのも寝起きが悪いから一つだけ忠告。

「そこから動くなよ……」

まあそんなこと言つても動くよねー。なんてことを考えていたので速攻で決めることにした。

「心配すんな。俺はお前より強いから」

そつ言い放つと同時に万華鏡[与輪眼]をつかい月読を発動し、三田間くすぐり続けられる幻術を見せた。

もちろん男は気絶。場は何が起こったかわからない。
かけた俺も人相手に幻術はあまり使ったことがないので不安で足が
ガクブル、生まれたての子ヤギよりもひ弱そうだった。まあ結果は
成功だったのに胸をなで下ろしていると、

「そろそろ」の樹を何とかして欲しいですの…」

黒子の「」とをすっかり忘れていて術をかけっぱなしにしていた。

「わりーわりー、忘れてた」

「これはアナタの能力なんですか？」

「そんなもん」

「じゃあ先ほどの瞬間移動は？」

「氣合」

「じゃ、じゃあ男が倒れたのは何故ですか？」

「漢氣」

「あなたは女じやありませんの…？」

「男じやボケ！」

「嘘つくんじゃありませんのー。その顔立ちまだからどうでも女性しかあり得ませんか！！」

「あアー？ーーーーーで脱いでやるつかーー？」

「！」となんど脱ぐなんて破廉恥なー！」

「わつお前絡みずれえよーーーー！」

「うやらみんな俺のことを『女』にしたいらしい。

その後強盗犯を繩でしばり、アンチスキルが来る前に俺はトンズラにいりふとあると、

「こりこり事情を聞きたいので待つて欲しいですの」

と笑顔で言われたがめんどくさこのでダッシュで逃亡した。後ろから「責めて名前だけでもーーー！」とか聞こえたが幻聴だと信じて走り抜いた。

が、どこに行つていいかわからないので、また半べになりながら街をうろついたとき。

おしまい、おしまい。

SIDE ???

ビルの中機械が放つわずかな光に照らされている人がいた。

男か女かさえわからない。

その人は薄く笑みを浮かべ、

「ふむ……見たことのない力だ……面白い、君はいったい私に何を証明してくれる?」

第四話（後書き）

いかがでしたか？

感想、評価をお願いします（――）

第五話

そして時間は流れた。

いやいや早くね？って思った奴！それは正しいから自信をもつていよいよ！

まああれから4ヶ月ぐらいは経ったかな？引っ越しつて以外に大変なんだよね～。

季節は夏に両足を突っ込んで、人々の頭がぽぽぽんになる季節だ。

俺がなんだが……。

あれから原作のキャラにはあつていない。

そんな俺も今、セブンスミストに行こうとしています！

なんでもまた行くつと思つたかと言つと…

「夏服がない……」

半袖とか短パンとかが、なぜか一枚もないとか言つカオスな感じに。

あといろいろ行動を起しえないと来るべき時に間に合わなくなる。

俺だつてちやんといろんないと考へてるんだからねー。

まあそんな感じの軽い気持ちなんだけど、今巷で話題になつてている
『連續虚空爆発事件』（クリビトン）が、確かセブンスミストで起
こるはずだからそこを狙つー。

上琴は好きだナビ」「まもりわせてまいるこますよ。

ではミッション開始！

風紀委員活動第一七七支部に一人、白井 黒子はいた。

「やっぱり場所も時間も関係性が認められませんわね……」

黒子はこの頃連続的に起つてゐる『虚空爆発事件』をあつていた。

「もう少し手掛かりがあれば、容疑者の絞りこみもできますのに……」

しかし犯人を特定するものがひとつもなく事件は行き詰まっていた。

「遺留品を^{サイゴメトリー}読心能力で調べても何も出ませんし、同僚が九人も負傷しているというのに……何か……」

ここでは黒子はある違和感に気づいた。

「九人！？ いくら何でも多すぎではありません？」

今私は佐天さんと御坂の二人でセブンスミストに来ています！

白井ちゃんには悪いですけど……。

ちなみに御坂さんがトイレに行っているので待っています。

（　）（　）（　）

この着信音は私のケータイだ……

「はー、もしも…」「初春ツ！…今どこいらっしゃるんですの？…？」

「しつ…白井さん…えっと現在警ら中でありますので…」「…？」
ている訳では…」

「例の虚空爆発事件の続報ですの！」

「えつ！？」

「衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ」

「か、観測地点は？」

「今、近くの風紀委員を急行させています。あなたも速やかに現

場に向かいなさい」

「ですから観測地点つ…」

「第七学区の洋服店『セブンスミスト』ですのー。」

「ラッキーですー私、今ちょうどそこありますー。」

「何ですかー!? 初は…ー!」

携帯を切った。

今度は…今度こそは絶対にー!

研修中だつたこの事件を少し思いだし、心に誓つた。

人がだんだんいなくなってきた。

それもそのはず、さつきから店内では電気系統のトラブルが起きたから避難しろってアナウンスが流れている。

SIDE 葵

「わ… そろそろ仕事だ」

SHIDE 美琴

「よしつ、とりあえずこれで全員…」

「あの子は?」

全員が避難したか確認している途中、シンシン頭の『上条 当麻』が慌てたように話しかけてきた。

「は?まだ戻つてなかつたの?」

「人が多すぎてよくわかんねーけどたぶんまだ……」

美琴はその言葉を聞いた瞬間嫌な予感が身体中に響き渡った。

「おねーちゃん」

すると女の子がどこからかパタパタと歩いてきた。

「ここに『氣づき』女堵の息を漏らした。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてつて」

といいながら渡してきたのはつい先程みかけたカエルの人形だった。

その瞬間初春は女の子から人形を奪い取り、それを投げた。

「逃げてください！－！あれが爆弾です！－！」

そう言い放った瞬間、人形はべきべきと形を歪めた。

レールガンで爆弾を吹き飛ばそうとしたが、無情にもコインは手のひらから滑り落ちた。

誰しもが死を覚悟した瞬間、声が響いた。

「須佐能乎」

ドロン

尋常じゃないほどの大爆発が起きた。巻き込まれたらただじゃおかなければどの火力だった。

だが『巻き込まれたら』だ。

「生き……てる?」

みんな呆然としていた。

それもそのはず、誰一人ケガをしていないからだ。

「生きてる~?」

やる気のないような声が聞こえた。

声の方向を見ると、目が紅く、その中に六芒星がある少年が立っていた。

避難が終わるまで「ララララ」と思つた俺はそこいら辺をうねりよろしていた。

「爆弾を壊すか、防ぐ…どうぞしよう?」

S H D E 葵

と考えていると女の子がメガネをかけた男に人形を渡すシーンに出くわした。

その時、いつもはあまり動かない俺の頭がフル回転した。

ここからに田印にをつけたら楽しじやね？

そうと決まれば即行動！

俺はいかにも一般人らしく、

「君たち、避難しなきゃだめだろ？？」

メガネをかけた男は肩をビクッと震わせたあと、責めた様子で、

「あつ…はい…今すぐいきます。」

「君…眞命でも悪いのかい？」

そういうときさりげなく体をさわり田印となる術式をつけた。

「だ…大丈夫ですんで…」

「せうか、じゃあ頬も早く避難しなさい。私は上の階を見てくる。女の子もこきなさい。」

今度は女子の子の体を軽くせわづこひびきも留印をつける。

「うんー。」

女子の子は元気いっぱいにつなぎた。

「じゃあ私は行く。あとは任せたよ。」

と言つて俺はその場を離れた。

その時の俺は柄にもなくイラついていた。

俺はまずメガネの爆弾魔を殴り飛ばそうと考えたが、証拠もないのに殴るのはさすがにできないと考え、女子の方を優先することにした。

案の定女の子はメガネの言つことを守つたらしく、カエルの人形を頭がお花畠の（文字通り）風紀委員に渡していた。

しかし風紀委員も気がついたらしく、女の子から人形を奪い取り誰もいないところに投げた。

しかし所詮は女の子、人形は遠くに投げるのは難しい。

俺は即座に印を結び女の子の元へ飛んだ。

そして女の子の前に出た俺は両目の写輪眼を発動し、須佐能平すさののおを呼び出した。

爆弾は強力だつたがなんとか全員を守ることができた。

と俺は後ろにいる四人に軽い調子でたずねた。

「生きてる~？」

「ケガとかないよつだね、良かつた」

短髪で茶色がかつた髪の毛の女の子が聞いてきた。

「お前、誰だ？」

シンシン頭の少年が疑うように聞いてきた。

「立花 葵つていいます。アンタは?」

「俺は上条 当麻、助けてくれてありがとなー。」

「私は御坂 美琴よ」

「初春 飾利です…貴方もしかして白井さんを助けてくれた人ですか?」

「おーーもしかして郵便局の?」

「そうです!あの時はありがとうございました!」

「いえいえ、あの人なんか言つてた?」

「ハイ!次あつたら逃がさないって

「会つ氣がなくなつた!」

「えつ?どう?」と?」

いきなり初春と話が弾んだが残りの一人はまったくついていけない
ようだった。

「あつ！犯人を追わなきゃ！」

御坂は思い出したかのよつて言つた。

「待つてください。俺が行きます」

「えつ、でも……」

「俺もちよつと腹がたつてるんで」

俺はそつと印を結びもう一つの印に飛んだ。

SIDE ???

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばせるー。」

その人の心は狂っていた。

傷つき、淀んで、壊れかけていた。

悪いのは力任せに傷つけた人達。

悪いのは助かることができなかつた人達。

悪いのは助かると努力しなかつた本人。

だから問おう。

『お前は何がしたい?』

「ハツ！やり返すんだよ！！僕を傷つけた奴等や、助けてくれなかつた無能な風紀委員たちに！！」

『お前はどうなりたい？』

「誰も僕をバカにしないくらいに強くなりたい！」

『そつか…、では最後の質問だ。』

お前はいつ、自分を棄てた？

「…ツ！」

その一言で一瞬息がつまつた。

「ぼくは僕だ！」

『違うな、自分をなくして強さに依存した、ただの弱者だ』

『何が違う？力があればお前は助かると思つてゐるだらう？力があればなんにでもなれると思つてゐるだらう？』

「黙れ黙れ！僕は強いんだ！僕は…僕は…！」

『哀れな子羊には魂の救済を……』

首に強い衝撃を感じながら僕は意識を手放した。

第五話（後書き）

最後の台詞は「ディーなんぢや」を意識しました

もうストッパー切れたよ……orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1511s/>

とある忍者の写輪眼

2011年4月6日21時51分発行